

第2回(7月13日) ヴィデオ&トーク 『ライアの娘』

『ライアの娘』—各国での評価をめぐって—

岩見 寿子

このあまりにも有名な作品について話をすることになって、果たしてどんなアプローチをとったらいいかしぼし悩んだ。映画の主題については、たいていのことは言い尽くされている。今更、正攻法でいくのはあまりおもしろくない。どうしたらいいか?その時、古い映画を見る度に、データ等を参照するため手元に置いて重宝している *Video Movie Guide* (ed. by Mick Martin & Marsha Porter) では、この作品に対する評価がとても厳しかったのをふっと思い出した。5つ星が最高であるレーティングも、半分の2つ半しか与えられていない。日本では名作としての評価が定まれていると思われるのに、アメリカでは必ずしもそうではないのか?それをきっかけとして『ライアの娘』についての内外の映画評をいろいろ集めてみることにした。その結果、実に興味深い傾向が読み取れたのが、今回のトークのテーマになったのである。

かなり大雑把にあって、イギリスでの評価は賛否半ばするといったところであったが、予想通りアメリカでは総じて低い評価が下されていた。アイルランドでは、かなり手厳しいといった印象。日本での高い評価と比べなぜこうも違うのだろうか?映画評に述べられているコメントを手掛かりとして仮説をたててみた。それは各論者の自然観の違いに由来するのではないかと。この映画の主題と密接に結びついているアイルランドの自然の描き方、さらに言えば主人公ロージーの感情と自然描写とが一体となった映像表現に対する受け止め方の違いが、作品の評価にあらわれているのではないかと考えたのである。

例えば、自由を求めるロージーの理想が自我の解放であり、自然と一体になることであるという表現に対して、あるアイルランド人批評家は不快感を隠そうとはしない。彼にとってそれは「自然への降伏」ないし「従属」を意味するからなのだ。『ニューヨーク・タイムズ』の論者もロージーが「自然現象と感応しあう」様を皮肉たっぷりに言及してみせる。少なくともこの両者の意見の暗黙の前提になっているのは、ヨーロッパ近代において確立された征服的・機械論的自然観なのである。主体である人間に対し、客体である自然は、人間に征服され、利用されるべき存在であると認識する者にとって、自然との感応や自然との一体化というのは、原始への退行以外の何物でもなく、人間の尊厳を傷つけるものと感じられるのだろう。また自然への回帰願望はすなわち自然への逃避であるとするネガティブな見方がなされるのだ。

このような欧米での見方に対し、人間の生の営み

が自然との関わりあいの中で描かれるこの作品は、日本では、自然との調和を求める風土的自然観に基づいて、高く評価されているように思う。先に引用したアイルランド人批評家は、「アイルランド人にとっての自然は闘争と共存という2通りの意味をもっているのに、この作品ではそれが一面的にしか描かれていない」と批判するが、興味深いことに日本人批評家たちは、この作品にきちんと2通りの意味を見いだしているのだ。

しかしアイルランドでこの作品を評価する場合、更に複雑な要素がからんでくることを見すごしてはならないだろう。この映画は、監督も脚本もイギリス人であり、イギリス的な観点から描かれていることは否定できない。そのような作品において、主人公のアイルランド人女性を前近代的な存在(と先程の批評家は感じている)として描くことは、アイルランド人全体が前近代的な存在であるかのように類型化しようとする、植民地主義的偏見が介在すると映ってしまうのである。

『ライアの娘』は一般の観客からは強く支持され、アイルランドを含む各国でかなりの興行成績をあげた。しかし、『戦場にかける橋』『アラビアのロレンス』で連続して米アカデミー賞の作品賞と監督賞を受賞して栄光に包まれていたリーン監督だが、『ライアの娘』ではノミネートすらされていない(撮影賞と助演男優賞の2部門で受賞)。3年もの歳月をかけ、心血を注いで制作したこの作品が酷評されたショックからリーンは長い沈黙に入ってしまった、一時は引退したと見なされたほどだった。しかしそれから14年後に『インドへの道』を発表する。リーンは、自然との交流によって人生を狂わせていくヒロインを通して、西欧近代の自然観の持っている限界の提示という『ライアの娘』が内蔵していたテーマを、ここで再度取り上げてみせている。彼はフォースター原作の『インドへの道』を映画化しながら、その根底には『ライアの娘』への思いが渦巻いていたような気がする。巨匠の執念に胸をつかれる思いがしたのは私だけであろうか。

---

『ライアの娘』 *Ryan's Daughter* (1970年 イギリス映画 194分) 製作: アンソニー・ハヴロック＝アラン 監督: デヴィッド・リーン 脚本: ロバート・ポルト 撮影: フレディ・A・ヤング 出演: サラ・マイルズ、ロバート・ミッチャム、トレヴァー・ハワード、クリストファー・ジョーンズ、ジョン・ミルズ、レオ・マッカーン